

2016/11/21



軌跡そして感謝

昭和 41 年機械科卒 梁 池 隆

第 7 回の野球部 OB 会総会（平成 28 年 4 月）に初めて参加しました。

卒業以来、本当に久しぶりに会った仲間達、皆、初老(?)の紳士であり、長年に亘り親交のある藤山君の紹介を受けなければ誰だか見当もつかない人もいて驚きの日でした。普段は縁のない後輩達も何となく可愛らしく応援したくなる様な気持ちにさせられた一日でもありました。

2ヶ月後に昭和 41 年卒と他 2 名(川崎氏、古沢氏)の参加で 9 名、OB 会の分科会を開催しました。50 年ぶりに会った友人(阿部君)を含め昔話に花が咲き、大いに飲み青春を取り戻した様な気がしたものです。

高校の思い出と言うと、まず昭和 39 年、夏の長崎サバクと呼ばれた大渇水です。2 日で 3 時間しか水は出ず、出ても真っ赤な水で、溜めて沈殿するまでは使えません。練習後に長崎大学の塀を乗り越えて井戸水で身体を洗うのが日課でした。飲み水は、当時のスポーツではタブー視されていて、練習、試合の途中では飲めなかったのが不幸中の幸いでした。

さて 3 年生の夏の大会での我が長崎工業高校野球部の新聞の評価はどうであったのかスクラップブックから拾ってみました。当時としては珍しい白地に緑色の文字、緑色のアンダーシャツ、ストッキングの出で立ちのチームは「ダークホース」「大型チーム(平均身長 171.5cm)」「小技はしない」「大型打線(1 番から 6 番までは 3 割バッターが並ぶ)」まあ、こう言ったところでしょうか？予算も応援団も少なく、今の名門高校の様に野球 ”命” で明け暮れた訳でもなく、当時増えて来た竹バットにしびれながら、皆が好きな打撃中心の練習をして来たような気がします。当然と言えば当然の評価だったのでしょう。

当時部長の尾藤先生や田口監督が時々開いてくれた焼肉パーティが効いたのか、それでもあれよあれよと言う間に勝ち進み、長崎 26 校で残ったのは長崎工業と海星の 2 校でした。西九州大会に進み、佐賀県代表校 2 校(武雄、佐賀商)と対戦し、惜しくも敗れはしましたが、今の様に一県一校なら甲子園出場も夢ではなかったかもしれません(愚痴?)他のメンバーもそう思っていたのではないのでしょうか？(※野球部の沿革昭和 40 年-1965 年参照)

佐賀からの帰りの列車の中で先輩が差し入れてくれた丸ボーロの甘さを噛みしめながら窓に映る自分を見つめて”あ〜”これで終わったと何かホッとしたの

を覚えています。

後輩の皆さんに言いたい。今の皆さんは優れた指導者の下、洗練された技術を持ち、立派な専用グラウンド、後援会がありながらなぜ成績が残せないのか、自分自身に問い直し、そして果敢に挑戦して欲しいと思います。野球を通じた私の3年間は本当に充実したものでした。今の人生に導いてくれた3年間でもありました。

当時のメンバーには本当に感謝していますし、これから、このつき合いが”ず”〜っと続くことを願っています。

OB会の役員の皆様、山内君これからも宜しくお願いします。

※参考

昭和40年(1965)夏(第47回全国大会県予選)

1回戦 長崎工8-3 佐世保南

2回戦 長崎工4-2 瓊浦

3回戦 長崎工3-2 猶興館

代表決定戦 長崎工4-1 西海

西九州大会

長崎工0-6 武雄